

初めて患者へ穿刺した看護学生の体験 －臨地実習での簡易血糖測定のみかえりから－

平井孝次郎¹⁾ 小濱優子¹⁾ 岩瀬和恵¹⁾ 武内和子¹⁾

要旨

目的：本研究は、臨地実習の簡易血糖測定のみかえりから、初めて患者へ穿刺した看護学生の体験を検討して、今後の穿刺技術の教育方法について示唆を得ることである。

方法：初めて患者へ簡易血糖測定による穿刺を実施した A 看護短期大学 3 年課程 2 年次 6 名に対し半構造的面接を実施し、質的帰納的方法にて分析した。

結果と考察：看護学生は、測定前に新たな体験から学び取ろうと【医療行為を通して成長する期待感】に胸を膨らませていた。その後、針を用いて人を傷つけることへの恐怖による【侵襲行為との遭遇による躊躇い】を実感すると共に、【身体侵襲を受ける患者への思いやり】の感情が生まれていた。さらに、医療者として相応しい態度の模索をするなど【高度な要求に応えようとする意識】が芽生えていた。測定中には、患者の不安な視線に複雑な思いを抱き、看護学生の限界を感じ【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】が現れていた。測定後になると、医療に参加できたことに自信を深め【医療行為を行ったことによる達成感】を得ていた。さらに、侵襲行為には信頼関係が重要なことに気づく【侵襲行為を通してみる新たな発見】もしていた。そして、得られたデータの追及や技術の獲得に向けた【さらなる成長を求める向上心】が生まれていた。

キーワード：穿刺技術、侵襲行為、看護学生、臨地実習、簡易血糖測定

I はじめに

現在、看護師教育の臨地実習において、看護学生が侵襲を伴う技術を体験することが難しくなっており、侵襲を伴う行為を習得するためには、学生間で状況設定された学内演習で終了する授業展開になってきている。しかしながら、2011 年に厚生労働省より発表された「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」¹⁾の看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法という項目では、臨地実習で卒業時の到達目標を達成できるようにするために、実習場でしか体験できないことは確実に体験できるよう積極的に調整し、その後の振り返りを充実させることが重要であると指摘している。看護基礎教育における看護実践能力の卒業時の到達度は、2008 年に「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」²⁾によって示されているが、身体への侵襲がとりわけ大きい穿刺技術に注目すると、筋肉注射

や皮下注射などの注射技術が卒業時の到達度レベルとして設定されている。しかし、この注射技術はモデルまたは学生間での実施が最終到達度レベルとされており、患者への実施は最終到達度レベルとされていない。穿刺技術の中で、患者への穿刺が唯一到達度レベルとされているのは、簡易血糖測定（以下：血糖測定）である。すなわち、看護学生が臨地実習で侵襲性の高い穿刺技術を初めて患者へ実施する場合、血糖測定が多いと推測される。

一方で、看護師免許を有していない看護学生が、穿刺技術を他者へ行うことへの精神・身体的な負担は大きいことが報告されている³⁾。血糖測定や採血に関する先行研究では、学生間での演習ではあるものの、実施者である看護学生が恐怖や緊張、不安といった感情を持つことが散見されている^{4) 5)}。穿刺技術の対象が学生ではなく患者になった場合、患者への実施だからこそ意識化される現場のできごと、特別な思いを体験する可能性があると考えられる。しかし、国内において、看護学生が患者へ穿刺技術を実施し

1) 川崎市立看護短期大学

た際の体験に着目した文献はない。初めて患者へ穿刺技術を実施する際の看護学生の体験を明らかにすることは、侵襲を伴う看護技術教育の在り方を検討する意味において重要である。

本研究の目的は、臨地実習の簡易血糖測定のみから、初めて患者へ穿刺した看護学生の体験を検討して、今後の穿刺技術の教育方法について示唆を得ることである。

[用語の説明]

簡易血糖測定とは、簡易型の穿刺器具を用いて指先に穿刺を行い、得られた血液の血糖値を、血糖測定器を用いて簡易的に測定する方法である。主に糖尿病の治療や管理を目的として行われる。

II 用語の定義

体験：対象となる人が感じたさまざまな思いと、その起因となった状況をひとまとまりとして捉えた実際的な経験とする。

III 研究方法

1 研究デザイン

本研究は、臨地実習の簡易血糖測定のみから、初めて患者へ穿刺した看護学生の体験を検討するため、質的記述的研究デザインを用いた。

2 研究参加者

2年次の成人看護学実習が終了したA看護短期大学3年課程2年次全員に、研究者から口頭および文書を用いて研究参加を依頼した。研究者が不在の場所に同意書の回収箱を設置し、同意の得られた者を研究参加者とした。初めて患者へ血糖測定を実施した6名である(A～F)。

3 データ収集

学生がどのような思いを抱いていたのか、現場の体験を自分の言葉で話しやすいように、半構造的面接とし、簡易血糖測定の実施前から実施後までの思いやその時々状況についてふりかえり、自由に話してもらった。データ収集期間は2013年2月から3月であった。

4 データ分析

データ分析の手順は以下の通りである。

①各事例の全体像を把握するため、逐語録を精読

した。

②逐語録から看護学生の体験を示す部分を抜き出し、前後の文脈に留意しながら抜き出した部分の意味を損なわないように要約し、それをコード化した。

③コードを時間軸に沿って並べ、抽出されたコードの類似点と相違点を比較検討し、サブカテゴリーを抽出した。

④サブカテゴリーの抽象度をさらに上げ明確化し、カテゴリーを位置づけた。

⑤カテゴリー相互の関係性を時間経過に伴う変化を考慮しながら検討した。

分析過程において、看護学生の体験の解釈が適切であるかは、随時逐語録を再分析することにより検討し、適宜修正を行った。また、定期的に質的研究の経験のある3名にスーパーバイズを受け、検討を重ねることで、分析方法と内容の妥当性の確保に努めた。

5 倫理的配慮

本研究は、川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号：R25-1)を受けて実施した。

研究参加者には、研究の目的、意義、協力依頼内容等を文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。収集したデータを研究以外の目的で使用しないこと、研究への協力は自由意思によるものであること、研究に協力しない場合も不利益を受けないこと、協力を同意した場合もいつでも取りやめができること、協力を取りやめても不利益を受けないこと、面接では答えたくない質問には答える必要がないことを説明した。面接は大学内の個室とし、プライバシーの守られる場所で実施した。個人が特定されることを避けるため、個人名の代わりに記号を付し、取得したデータは鍵のかかる場所に保管する等、プライバシーの保護管理を徹底した。

IV 結果

初めて患者へ穿刺した看護学生の体験を示すコード数は153であり、25のサブカテゴリーが抽出された。さらに8つのカテゴリーに分類された。

血糖測定前では、新たな経験から学び取ろうと【医療行為を通して成長する期待感】に胸を膨らませていた。その後、針を用いて人を傷つけることへの恐怖といった【侵襲行為との遭遇による躊躇い】を実感すると同時に、しっかりと患者と向き合うこ

とで【身体侵襲を受ける患者への思いやり】の感情が生まれていた。さらに、血糖測定における時間の重要性の認識や、医療者として相応しい態度の模索をするなど【高度な要求に応えようとする意識】が芽生えていた。

血糖測定時には、患者の不安な視線を感じ、看護師と同様にできない看護学生としての限界を感じていた。このような思いを感じる状況の中でも、上手くできないことを反省し成長しようとする思いもあり、【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】が垣間見られた。

血糖測定後では、侵襲を伴う穿刺行為の体験に

よって、医療に参加できたことを実感して自信を深め、看護師へ向かう成長を実感するなど【医療行為を行ったことによる達成感】を得ていた。また、痛みを伴うケアの実践には信頼関係が大きく影響することに気づくなど【侵襲行為を通してみる新たな発見】もしていた。そして、穿刺することによって血糖値や患者への興味が増し、技術を獲得しようとする【さらなる成長を求める向上心】が生まれていた。以下では、血糖測定前・中・後の時間軸に沿って、抽出された8つのカテゴリー（【 】で示す）と25のサブカテゴリー（〈 〉で示す）を述べる（表1）。

表1 簡易血糖測定を通して患者へ初めて穿刺した看護学生の体験

| カテゴリー | サブカテゴリー | 語りより抜粋 |
|------------------|---|--|
| 〈血糖測定前〉 | | |
| 医療行為を通して成長する期待感 | 新たな経験から学び取ろうとする意欲 ミスなく成功に結びつけるための意識 針を扱うことによる成長の実感 | もう一步踏み込んで患者さんのケアをさせてもらえるんだ (C) 不足がミスとかにつながるのかなって思ってるところが私の中ではありました (A) 学年あがったんだなって感じになりました (E) |
| 侵襲行為との遭遇による躊躇い | 侵襲行為による心理的異常状態の察知 経験不足や技術的問題による不安 未知の体験が迫ることによる動揺 患者に危害を与えてしまう不安 | 人にそうやって刺すっていう心理状態自体が通常のケアとは違う (B) できるかなって不安に思ったし、手技も心配だった (A) とうとう目の前にきたって感じで舞い上がってました (A) 全部お先真っ暗って感じで考えちゃうんで (A) |
| 身体侵襲を受ける患者への思いやり | 侵襲的な治療による苦痛への共感 余計な心理的負担を掛けない配慮 | ずっとやるの可哀そうだなと思いましたね (D) 私が緊張しちゃうのが伝わっちゃうかなって (F) |
| 高度な要求に応えようとする意識 | 血糖における時間の重要性の認識 侵襲行為をすることへの責任感 医療者として相応しい態度の模索 感染への危機意識の高まり | 他のケアと違うと思ったのは、血糖測定は時間が大事じゃないですか (A) 侵襲の与えるものを行うっていうのは、責任が絶対かかってくると思うんですよね (C) 看護師として、痛そうとかここで思ってる感情を出さない方が良いと思って (D) 感染っていうまた一步危険度が上がるので、もしこちらがミスをしたら生死に関わる (F) |
| 〈血糖測定時〉 | | |
| 未熟な自分が穿刺することへの葛藤 | 看護師の視線による心理的な圧迫 不安と期待を寄せる患者への複雑な感情 看護学生における限界への気づき 苦痛を与えていることへ実感 | 指導者さんの視線が一番痛かった気がします (E) ちょっと複雑な感じはありましたね (C) やっぱり学生の限界ってあるなって思った所はあります (C) やっぱり痛い思いさせているし (B) |
| 〈血糖測定後〉 | | |
| 医療行為を行ったことによる達成感 | 無事に終えて生まれた安堵 医療行為に参加できた喜び 看護師へ向かう成長の実感 | ほっとしたっていうのが最初の感想ですね (C) これが看護につながるんだって思ったところが私の中では嬉しくて (A) 看護師さんのやってることに近づけてるってことで、ステップアップしてるみたいな感じかな (E) |
| 侵襲行為を通してみる新たな発見 | 身体を察する能力への驚嘆 信頼関係が深まっていくことの実感 | 体のことを察するセンサーみたいなものがあるんだなって思って、すごいと思いました (A) 安全に行えたっていうことが、私を受け入れてくれたんだなっていうのはあります (C) |
| さらなる成長を求める向上心 | 血糖値が意味することへの追及 対象理解を促進する興味形成 経験を重ねることによる成長への期待 | 得られたデータをもとに分析しないとなみたいな意欲があったように思います (D) 患者さんがどんな風に思うかだとか、そういった所まで考えるような機会になった (B) 対象に合わせた対応ができるように、ちょっとずつそういうスキルを増やしていきたい (F) |

1 【医療行為を通して成長する期待感】

このカテゴリーは〈新たな経験から学び取ろうとする意欲〉、〈ミスなく成功に結びつけるための意識〉、〈針を扱うことによる成長の実感〉という3つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈新たな経験から学び取ろうとする意欲〉

血糖測定を実施することが決まった看護学生は、

演習での学習を実践の場で再確認する機会や、一步踏み込んだケアを実践できる機会を得たと感じ、前向きに学びを得ようとする意欲がみられた。

「もう一步踏み込んで患者さんのケアをさせてもらえるんだという気持ちになりました。もうかなりその時は前向きでしたね。あの、本当にこの患者さんのもう少し先の

事を分かるんだ。分からせてもらえる機会ができたんだと思って。」(学生C)

「演習で学習してきたことを実践できるっていうところで、しっかり思い出さなきゃいけないとか、再確認できるっていうのが頭の中にありました。」(学生C)

2) 〈ミスなく成功に結びつけるための意識〉

血糖測定の実施がミスなく成功するために、準備不足がないよう意識している看護学生の様子がみられた。

「たとえば消毒して針持ってくるの忘れたら、消毒の意味なくなっちゃうし、(患者を)待たせてるのも悪いと思って、なんか、不足がミスとかにつながるのかなって思ってるところが私の中ではありました。」(学生A)

3) 〈針を扱うことによる成長の実感〉

看護学生は、患者に初めて針を用いて行う行為を特別なことと認識していた。さらに、この特別な経験が、看護師への階段を登る感覚を生みだし、看護学生は自らの成長を実感していた。

「自分の中でも点滴とか注射とかほんと医療行為で、けっこう大ごとだと思っていて、刺してしまうということが、血が出るし、なんか良いんだって言う感じで、学年あがったんだなって感じになりました。」(学生E)

「針を患者さんっていうか人に刺すっていうことを今までやってなかったんで、私はなんかちょっと看護師っぽいじゃないですけど、医療っぽいことやるなっていう実感というか感動みたいな、自分も看護師っぽいことができるようになって嬉しかった。」(学生F)

2 【侵襲行為との遭遇による躊躇い】

このカテゴリーは〈侵襲行為による心理的異常状態の察知〉、〈経験不足や技術的問題による不安〉、〈未知の体験が迫ることによる動揺〉、〈患者に危害を与えてしまう不安〉という4つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈侵襲行為による心理的異常状態の察知〉

看護学生は、穿刺を侵襲行為と捉え、針を用いて人を傷つけていると感じていた。さらに、今まで行ってきたケアとの違いを自覚し、心理的に異常な自らの状態を察知していた。また、その穿刺によっ

て血液を扱うことによる感染に対して恐れを抱いていた。

「針を刺すってところが一番あって、侵襲するっていうのもありますし、血が出たりとか、例えば感染症を持っている患者さんでしたら、それに対する恐さだとかも結構出てくると、人にそうやって刺すっていう心理状態自体が通常のケアとは違うっていうのがあると思うんですよ。」(学生B)

2) 〈経験不足や技術的問題による不安〉

初めて患者へ血糖測定する看護学生は、自らの経験の少なさや技術的な未熟さを認識し、正しい技術が提供できるか不安に感じていた。

「できるかなって不安に思ったし、手技も心配だった。練習って言ったらなんですけど、学校でも友達同士のやつを一回やっただけで、できんのかなって思って。」(学生A)

3) 〈未知の体験が迫ることによる動揺〉

看護学生は、針を人に刺すという未知の体験が目の前に迫り、緊張や不安、興奮によって感情のコントロールが難しい状態となっていた。

「やばい刺すって感じでした。刺しちゃう私みたいな。なんかホントにできるんだっていうウキウキ感じじゃなくて、なんかもう緊張が出てきちゃって、できんのかなって、さっきの手技がとうとう目の前にきたって感じで舞い上がってました。」(学生A)

4) 〈患者に危害を与えてしまう不安〉

血糖値に応じた治療が行われる実際の医療現場の中で、看護学生は、血糖測定が正確に実施できないことにより間違った治療が行われてしまうことを想像し、患者に危害を加えてしまうことを不安に思っていた。

「血糖値の値で(インスリンを)何単位打つて決まってるから、誤差とかでちゃったらどうしょとか、私が正しく測定できなくて、それで変なことになって糖尿病だから色々とか…、なんか全部お先真っ暗って感じで考えちゃうんで。」(学生A)

3 【身体侵襲を受ける患者への思いやり】

このカテゴリーは〈侵襲的な治療による苦痛への共感〉、〈余計な心理的負担を掛けない配慮〉という2つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈侵襲的な治療による苦痛への共感〉

連日行われている穿刺の痕を観察した看護学生は、患者が感じている苦痛を理解しようとする共感的な思いを寄せていた。

「人差し指にする時に、昨日とかその前の日の痕とかやっぱり残ってるんですよ。だから、ずっとやるの可哀そうだなと思いましたね。」(学生D)

2) 〈余計な心理的負担を掛けない配慮〉

看護学生は、初めての侵襲的なケアを実施することの怖さが症状として現れ、患者に伝わってしまうことを恐れていた。それは、患者の心理的負担を増幅させないための配慮であった。

「私が怖いと思って引いちゃって震えちゃったりとかしたら、やっぱり嫌かなって思って、それだけは避けようと思って…、やっぱり私が緊張しちゃうのが伝わっちゃうかなって。」(学生F)

4 【高度な要求に応えようとする意識】

このカテゴリーは〈血糖における時間の重要性の認識〉、〈侵襲行為をすることへの責任感〉、〈医療者として相応しい態度の模索〉、〈感染への危機意識の高まり〉という4つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈血糖における時間の重要性の認識〉

血糖測定における時間の重要性を認識した看護学生は、定刻に血糖測定が実施できるように環境を整えようと考えていた。

「他のケアと違うと思ったのは、血糖測定は時間が大事じゃないですか。食事の何分前とか決まってるし、これがズレたらなって感じでした。あと看護師さんを捕まえるタイミングもあるじゃないですか、今逃してもうちょっと後にしようって言われたら、ズレズレになっちゃうから。」(学生A)

2) 〈侵襲行為をすることへの責任感〉

看護学生は、実際の患者に行う侵襲行為に対して強い責任を感じていた。その責任感が、患者にでき

るだけ侵襲が加わらない方法を考える原動力となっていた。

「実際に療養されてる患者さんに対して何か侵襲の与えるものを行うっていうのは、責任が絶対かかってくると思うんですよ。となると、じゃあ、患者さんに対して極力侵襲を与えないように行うためには、どういう準備をして、どうやったらいいかというところまで深く考えていかないといけないと思うんです。学内でも同じでしょうけど、特に臨地の時っていうのはそういう気持ちが強かったと思います。」(学生C)

3) 〈医療者として相応しい態度の模索〉

看護学生は、看護師の様子を伺いながら、穿刺をする際に相応しい医療者としての態度を模索していた。また、看護師を真似するように、感情のコントロールも図ろうとしていた。

「痛いかなって思うことがダメって言うか、ダメなのかなって思って、やっぱり看護師として、痛そうとかここで思ってる感情を出さない方が良くって。指導者さんとか担当の看護師さんも普通にブスッって刺して、今日はなんとかでねってやるから、こういう感じでやらなきゃみたいな感じです。」(学生D)

4) 〈感染への危機意識の高まり〉

看護学生は、血液を扱う血糖測定を通して、感染への危機意識を一段と高めていた。

「血液とか感染っていうまた一歩危険度が上がるので、もしこちらがミスをしたら生死に関わるっていうか、そういう何かもっと注意していかなければとは思う。」(学生F)

5 【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】

このカテゴリーは〈看護師の視線による心理的な圧迫〉、〈不安と期待を寄せる患者への複雑な感情〉、〈看護学生における限界への気づき〉、〈苦痛を与えていることへ実感〉という4つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈看護師の視線による心理的な圧迫〉

看護師立ち合いのもと血糖測定する看護学生は、看護師から向けられた視線を強く感じていた。看護学生は、その視線を自分に対する疑い目だと感じ、心理的に圧迫された状態に陥っていた。

「慣れてないのでガチガチで緊張してるし、看護師さんの視線もすごく浴びるし、いくらイメージトレーニングとか準備していたとしてもタドタドしちゃってたんです。この子、本当に準備してきたのかなと思われてるかもしれないし、指導者さんの視線が一番痛かった気がします。」(学生 E)

2) 〈不安と期待を寄せる患者への複雑な感情〉

患者から血糖測定することを許された看護学生は、学生に身を委ねたことによる患者の不安と、自らに寄せられた期待を汲み取り複雑な感情を抱いていた。

「患者さんは言葉ではそうやって私に委ねてくれていますが、お前大丈夫か、みたいな感じでやっぱり不安な感じもあるし、やっぱりこう、ちゃんと頑張ってくれよっていう意味もあって、その辺はちょっと複雑な感じはありましたね。」(学生 C)

3) 〈看護学生における限界への気づき〉

看護学生は、看護師と自分が血糖測定した時の患者の様子を比較し、患者が学生の実施時に用心していることに気づいた。また、看護師と看護学生の違いを認識したことで、学生の限界も同時に感じていた。

「患者さんが本当に私に身を委ねてるのであれば、いつもの患者さんのように手だけ出して、何も見ずにやるんでしょけど、やっぱりそこで、自分の手をみて私のこと見てるってことは看護師さんと違うんだなって。やっぱり学生の限界ってあるなって思った所はあります。」(学生 C)

4) 〈苦痛を与えていることへ実感〉

患者へ苦痛を与えることに申し訳なさを感じた看護学生は、穿刺を振り返り、患者の苦痛を最小限にする方法がないか検討していた。

「血液が上手く取れなくて申し訳ない気持ちになりましたね。やっぱり痛い思いさせているし。それで、刺し方一つにしても、もうちょっとやりようがあったのかなっていう風に考えて。あと、刺す位置とかによっても結構違うかなとか。」(学生 B)

6 【医療行為を行ったことによる達成感】

このカテゴリーは〈無事に終えて生まれた安堵〉、〈医療行為に参加できた喜び〉、〈看護師へ向かう成長の実感〉という3つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈無事に終えて生まれた安堵〉

患者に初めて穿刺した看護学生は、事故なく無事に実施できたことに安堵していた。

「患者さんに初めて針を刺して、事故なく終わることが出来たっていう事で安心して、ほっとしたっていうのが最初の感想ですね。」(学生 C)

2) 〈医療行為に参加できた喜び〉

測定した血糖値を用いて治療が行われる光景を目の当たりにした看護学生は、医療チームの一員として医療に参加していることを自覚し、喜びを感じていた。

「看護師さんに値を報告するじゃないですか、その後にインスリンを何単位打とうって言うってくれたんで、あ〜、本当にこれが看護につながるんだって思ったところが私の中では嬉しくて、自分も参加できてるんだと思って。」(学生 A)

3) 〈看護師へ向かう成長の実感〉

医療者のみが許される他者への侵襲行為を行うことで、看護学生は看護師への道を着実に歩み、成長している実感を得ていた。

「なんか段々自分が成長してって看護師になっていくのかなって実感はすごい湧いています。より看護師さんのやってることに近づけてるってことで、ステップアップしてるみたいな感じかな。」(学生 E)

7 【侵襲行為を通してみる新たな発見】

このカテゴリーは〈身体を察する能力への驚嘆〉、〈信頼関係が深まっていくことの実感〉という2つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈身体を察する能力への驚嘆〉

自覚症状から高血糖の可能性を指摘した患者の予想が的中したことで、看護学生は患者の思いも寄らないセルフモニタリング能力の高さに気づき驚嘆した。

「数値言う前に今日は頭がくらくらするから高いとか言っていて、実際いつもより高かったんですよ。患者さんって本当に自分で分かっているんだっていうふうに思って、自分の体のことを察するセンサーみたいなものがあるんだなって思って、すごいと思いました。」(学生 A)

2) 〈信頼関係が深まっていくことの実感〉

看護学生は、針を刺すという侵襲行為を患者から許されたこと、またその行為を安全に患者へ提供できたことにより、患者との信頼関係の深まりを実感していた。

「人の体に針を刺すというすごく責任の重い事を、患者さんも納得して私にやってもいいよって言う風に言ってくれて、実際にそれを安全に行えたっていうことが、私を受け入れてくれたんだっていうのはあります。」(学生 C)

8 【さらなる成長を求める向上心】

このカテゴリーは〈血糖値が意味することへの追及〉、〈対象理解を促進する興味の形成〉、〈経験を重ねることによる成長への期待〉という3つのサブカテゴリーから構成された。

1) 〈血糖値が意味することへの追及〉

侵襲によって得られたデータだからこそ、そのデータを持つ意味を意欲的に追求しようとする学生の姿が見られた。

「血糖値高くていいのかなってすごい考えて、指導者さんや先生に聞いたり、自分で調べたりとかするようになりましたね。でもやっぱり、針を刺して危害を加えるっていうか、針を刺すっていうことは大きいことだから、それをやって得られたデータをもとに分析しないとない意欲があったように思います。」(学生 D)

2) 〈対象理解を促進する興味の形成〉

看護学生は、血糖測定という侵襲を伴う初めての行為がきっかけとなり、患者の思いに興味を寄せ、対象理解を図ろうとしていた。

「今までは安楽とか安全っていう所をメインにおいていて、患者さんに苦痛を与えるようなケアっていうのは経験ないじゃないですか。患者さんがどんな風に思うかだとか、そういった所まで考えるような機会になったというのは大きな学びかなって思いますね。」(学生 B)

3) 〈経験を重ねることによる成長への期待〉

看護学生は、血糖測定の振り返りを行うことで、今回の経験を次回へ活かそうとしていた。さらに、前向きに経験を積み重ねることによる自らの成長を期待していた。

「前よりも普通の流れでできるように、例えば痛いとか訴えてくる人だったら、どうしたらいいのかなとか、対象に合わせた対応ができるように、ちょっとずつそういうスキルを増やしていきたいなって。」(学生 F)

V 考察

1 穿刺技術の体験における経時的な変化

臨地実習において看護学生が行うケアは、患者の安全と安楽を得る目的を第一に考え実施される技術が多い。そのような中で穿刺技術は、治療上やむを得ないケアであるが、安楽を得ることとは真逆の侵襲的な技術である。簡易血糖測定は、他の注射技術と同様に刺入部位やその周辺の血管・神経等の組織を損傷する危険性、また感染事故を発生する危険性はつねに持ち合わせており、安楽を目的とするケアとは異なる性質を持っている。今回、学生が初めて患者へ穿刺する体験を分析した結果、先行研究と同様に目の前に迫る患者への侵襲行為という技術は、看護学生に不安や動揺という心理状態を引き起こし、躊躇いの感情を生じさせていた。しかし、患者の同意のもとに行われる直接的な侵襲行為であるからこそ、正確な知識や方法を身につける重要性や、ケアの相互性が強く意識され、そこから何かを学び取ろうとする意欲が引き出され、学生にとって成長が期待される体験であることも捉えられた。患者に簡易血糖測定を行う実施中をはさみ、実施前、実施後で捉えられた変化は以下のとおりである。

実施前、これから患者の前に立とうとしている看護学生は、医療者としての意識を高め、患者に不安や苦痛を与えないよう配慮しようとしており、「侵襲の与えるものを行うっていうのは、責任が絶対かかってくる」と捉えられていた。だが、手技の確認や、自分への「期待感」や「戸惑い」なども含め、自分を起点に考えた観念的なものが多くあげられていた。

実施中に入ると、患者や看護師の反応を状況として五感で受け止め、観念的にだけではなく自分の身体感覚で患者を理解するに至っていた。「やっぱり痛い思いさせている」として患者の不安や苦痛は完

全には免れ得ないこと、看護が人を相手にする相互主体的な関わりを基本とした職業であることを身をもって体験していると捉えられた。

実施後になると、医療へ参加したことに対する達成感を感じるようになった。また、血糖測定を振り返ることによって、実施したからこそ得られる気づきや、患者との信頼関係が深まっていく感覚を実感していた。そして、看護学生は、侵襲行為によって得られた血糖値の分析を意欲的に追求し、対象の理解を促進させ、さらには経験を積み重ねることによって自らを成長させようとする向上心が湧き起こるようになっていた。

このような実施前、実施中、実施後における学生の思いの変化は、臨地実習という環境の中で、実際の患者と直接向き合うことにより、患者、看護師との実際の相互作用を通して起こる変化であり、実施中のカテゴリー【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】の内容に象徴される。実施中、学生は患者や看護師からの視線によって複雑な思いを抱くが、葛藤がありながらも前向きに侵襲行為に取り組んでいた。取り組みを続けられた要因として、対象が受け持ち患者であることが影響していたと考えられる。つまり、患者はそれまでの信頼関係によって学生による侵襲行為の実施に同意するのであり、学生は患者が未熟な自分に「委ねる」という身をもった期待に対して、苦痛をできるだけ与えたくないという思いが自然と強まり、最大限の努力をしていたと推察できる。「相互性」「関係性」に関しては実習でしか学べない学習内容であると考えられる。山手⁶⁾は、看護学生と患者との関係性を重視した実習方法には、体験の意味づけが重要であると述べている。このことから、実習で体験の学びを深めるためには、看護学生が技術の振り返りをする機会を設けることが重要と考える。本研究の参加者は、インタビューによって体験を振り返ることにより、体験の意味づけがされたと言える。

2 学内演習における学生の体験との比較

鐵井ら⁷⁾らによる自己血糖測定演習に関する研究結果では、穿刺時の気づき、測定結果が出る際の気づき、演習を通しての獲得という3つの看護学生の学習過程が確認されている。これは、時間軸で見ると、血糖測定前と血糖測定後の部分に相当し、経時的に学生の体験が推移していることが同様に捉えられる。一方で、血糖測定時に相当する学習過程は

確認できなかった。本研究では、血糖測定時の思いであるさまざまな学生の葛藤は観念が先行し、自分を起点とした考え方にとどまる傾向がみられていた。学内演習では、学生同士で行われる場合も考えられるが、ケアする・される関係ではなく、友人関係の平等の立場にあり、相手中心の深い関わり方までには至らないことが考えられる。実施中のカテゴリー【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】は、患者との関係性を強く意識する臨地実習だからこそ感じる特有の思いであると考えられる。〈不安と期待を寄せる患者への複雑な感情〉や〈苦痛を与えていることへの実感〉等の【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】に影響していることは、侵襲行為の対象が深い関係性を求められる患者であることによる学びであることが考えられ、学内演習との比較において大きく異なる点であると捉えられた。また、臨地実習における気管内吸引に対する看護ではあるが、下野ら⁸⁾によって行われた、学生の思いの研究では、看護学生は患者との関係が悪くなることを心配するということを報告しており、患者との関係性が影響してくるという側面において、本研究の結果と一致していた。研究結果に類似性がみられたのは、侵襲行為による関係性の揺らぎという共通事項があったからではないかと推察される。

3 穿刺技術の教育方法への示唆

本研究から、看護学生が臨地実習での血糖測定を実践する機会が得られた場合は、環境を整え、技術を通して成長できるよう支援していく必要性が考えられる。看護学生が穿刺という侵襲技術を実施して得られた患者理解や信頼関係という学びは、人を見る看護師において重要な要素の1つであると考えられ、患者への侵襲技術による学習効果はあると考えられる。しかしながら、看護学生は、躊躇いや葛藤を同時に経験することで、学内演習とは異なる高いストレスを抱えることになるため、事前確認やシミュレーションといった教員による支援が必要である。また、今回のインタビューによって、看護学生は自らの技術を回想し、新たな思いや学びの発見がみられており、教員は学生と共に侵襲技術について振り返る機会を実習中に積極的に設けることが、教育効果を高めると考える。

Ⅵ 結論

- 1 初めて簡易血糖測定した看護学生の体験は、【医療行為を通して成長する期待感】【侵襲行為との遭遇による躊躇い】【身体侵襲を受ける患者への思いやり】【高度な要求に応えようとする意識】【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】【医療行為を行ったことによる達成感】【侵襲行為を通してみる新たな発見】【さらなる成長を求める向上心】の8つが時間の経過とともに発展する過程であった。
- 2 臨地実習における患者への穿刺技術は、学内演習では感じる事が少ない【未熟な自分が穿刺することへの葛藤】という思いを経験していた。
- 3 身体侵襲の伴う技術教育の方向性として、臨地実習における患者への穿刺技術は、看護師として望まれる言動や態度の習得、患者の理解や関係性を考える機会になることから、教員は学生の思いの変化に留意し、可能な限り実践できる環境を整えることが望まれる。また、誰もができるとは限らない貴重な学習体験であるため、学生間での学びの共有が重要となる。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2011, p7.
- 2) 厚生労働省. 看護師教育の技術項目と卒業時の到達度. 2008.
- 3) 杉山敏子他. 看護学生が初めて注射針を刺入する際の生理心理指標の変化. 東北大学医療技術短期大学部紀要. 11 (2), 2002, p221-228.
- 4) 河井伸子. 川端京子. インスリン自己注射と自己血糖測定の演習を振り返って - 役割演技シミュレーションを取り入れた演習の試み -. 大阪市立大学看護短期大学部紀要. 5, 2003, p11-17.
- 5) 山崎智代他. 学生間での採血技術演習における看護師役割体験の学習内容 - 学内演習後の質問紙調査の内容分析から -. つくば国際大学医療保健学研究. 1, 2010, p183-191.
- 6) 山手美和. 緩和ケア実習における看護学生の学び - 死生観の変化と患者との関係性構築 -. 国立看護大学校研究紀要. 13 (1), 2014, p45-54.
- 7) 鐵井千嘉. 長家智子. 自己血糖測定演習を通した看護学生の学習過程. 九州大学医学部保健学科紀要. 8, 2007, p33-42.
- 8) 下野広美他. 看護学生の気管内吸引に対する思い. 日本看護学会論文集：看護教育. 36, 2005, p173-175.
- 9) 藤岡完治他. 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版, 医学書院, 2001.

Ⅶ 研究の限界

本研究結果は、A看護短期大学の学生6名に対するインタビューの分析結果であり、看護学生のすべての体験を表しているとは限らない。対象者が6名と比較的少数となったのは、実習期間中に看護学生が担当した患者の中で血糖測定をしている患者数が限られていたことが影響していると考えられる。しかし、その一方で、今までほとんど明らかにされていない患者への侵襲技術における看護学生の思いが明らかになったことは、看護基礎教育および新人看護師教育の在り方を検討する意味において意義のあることだと考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、貴重な体験をお話しくださいましたA看護短期大学学生の皆様に深く感謝いたします。

本研究の一部は、第13回日本看護技術学会学術集会(2014.11 京都)において口演発表した。